



2014年12月25日

独立行政法人建築研究所国際地震工学センター

第116号

〒305-0802 茨城県つくば市立原1 TEL 029-879-0678 FAX 029-864-6777

今月の話題

- 第10回アジア地震学会議出席
- IISEE 同窓会の開催
- フィリピン火山地震研究所訪問
- 研修生からの手紙
- 帰国研修生アンケート (途上国支援としての研修効果の定量的把握) 結果

研修 データベース

- IISEENET (地震防災技術情報ネット)
- IISEE-UNESCO レクチャーノート
- Eラーニング
- シノプシス・データベース (修士論文概要)
- Bulletin データベース

第10回アジア地震学会議出席

国際地震工学センター 主任研究員 藤井 雄士郎

横井国際地震工学センター長、原上席研究員、芝崎上席研究員及び藤井主任研究員は、11月17日から20日までフィリピン・マカティ市にて開催された第10回アジア地震学会議 (ASC) 総会に出席しました。

ASCは国際地震学・地球内部物理学連合 (IASPEI) 傘下のアジア・太平洋地域の組織として、参加国間の協力と交流・研究活動の向上・災害軽減の強化・他の国際組織との協力を目的とした組織です。



会場: デュシタニマニラホテル

横井センター長は、各国代表者会議に日本地震学会の代表として出席し、次回開催国 (オーストラリア) の決定や、組織改編の提案の採択に参加しました。原上席研究員は、「国際地震工学センターの地震学及び地震工学研修」と他に2件のマグニチュード関連テーマの発表を行いました。芝崎上席研究員は、「津波防災とグローバル地震観測に関する研修プログラム」とスロースリップイベント関連の発表を行い、また、藤井主任研究員は、「最近発生した津波のシミュレーションとシナリオ地震による津波高予測」について発表しました。



マカティ市長歓迎挨拶

この会合に参加することによって、帰国研修生と再会でき、また、ASC総会での発表をとおして帰国研修生が仕事で活躍し成功を収めていることが分かり大変嬉しく思いました。

地震データベース

2011年3月11日東北地方
太平洋沖地震

地震情報

宇津カタログ(世界の地震被害)

地震カタログ(世界の大地震の震源メカニズム、余震分布等)

論文募集

IISEE Bulletinは、現在地震学、地震工学、津波に関する論文を募集しております。開発途上国に関するものを対象としていますが、それに限らず募集しています。

送って頂いた未発表の論文は、編集委員会と専門家による査読を行います。投稿料は無料です。

是非チャレンジして下さい。



モンゴル: Munkhsaikhan さん
(2005-2006 地震学コース)



インドネシア: Tatok さん
(2011-2012 津波防災コース)



インドネシア: Sugeng さん
(2006-2007 津波防災コース)



(右) Laura Kong 博士
(ユネスコ国際津波情報センター所長)
(左) フィリピン: Joan さん
(2003-2004、2009-2010 地震学コース)

IISEE同窓会の開催

国際地震工学センター 上席研究員 芝崎 文一郎

11月20日19時～21時にマカティ市グリーンベルトにあるレストランで、フィリピンの帰国研修生であるJoan、Myleen、Julis、Ritoさんたちの協力のもと、同国では初めての同窓会が開催されました。

参加者は合計24名で、帰国研修生16名、現役講師の井上公氏(防災科研)及び石川有三氏(産総研)、元講師のLaura Kong 博士(ユネスコ国際津波情報センター所長)及び衣笠善博氏(東工大名誉教授)、IISEEスタッフ4名でした。



IISEE 同窓会集合写真

帰国研修生の参加当時の状況を語るとともに、近況を把握することができました。また、IISEEは、歴史のある非常にユニークな機関なので、今後も継続して欲しいというコメントを頂きました。IISEEスタッフも帰国研修生の活躍状況を知り、大変励みになりました。

フィリピン火山地震研究所訪問

国際地震工学センター 上席研究員 原 辰彦



楽しむのは今です。

11月21日の午前中にケソン市にあるフィリピン火山地震研究所 (PHIVOLCS) を訪問しました。最初に、Narciso F. Diongzon氏 (経理・管理部門、計画官Ⅱ、1992-1993地震学コース) から、フィリピン火山地震研究所の歴史、組織、地震観測網、地震監視に関する説明がありました。次に、Renato U. Solidum Jr.所長が、国際地震工学研修への期待と研究所員を継続的に研修に参加させる意向を述べられました。

その後、地震の監視システム、震源メカニズムの推定システム、津波データベース、震度観測網、津波モニタリングシステムについて説明を受けました。さらに、火山の監視体制に関する説明を受けた後、啓発活動、社会支援活動について説明を受けました。今回の訪問で、地震監視、津波警報システムの整備状況を把握できたことは、研修を実施するうえで大変に有益でした。

連絡先

IISEE ニュースレターは、IISEEと卒業生の架け橋を目指しています。

ニュースレターへの報告や記事をお待ちしております。皆様の自国でのご活躍をお知らせ下さい。

また、皆様の同僚やお友達もこのメーリングリストに登録するようにお誘い下さい。

iiseenews@kenken.go.jp
http://iisee.kenken.go.jp

バックナンバーは
下記をご覧ください。

http://iisee.kenken.go.jp/nldb/



PHIVOLCS 内のデータ取得センターで Vilma C. Hernandez 氏 (2010-2011 地震学コース修了生) から説明を受ける横井センター長(左)。



データ取得センターでの集合写真。横井センター長の右隣が Renato U. Solidum Jr.所長。

研修生からの手紙✉

✉ Mr. Sithipat PALANANDANA

タイ王国 内務省 公共事業・国土計画局 構造・耐震工学技官
(タイ、地震工学コース、2007-2008)

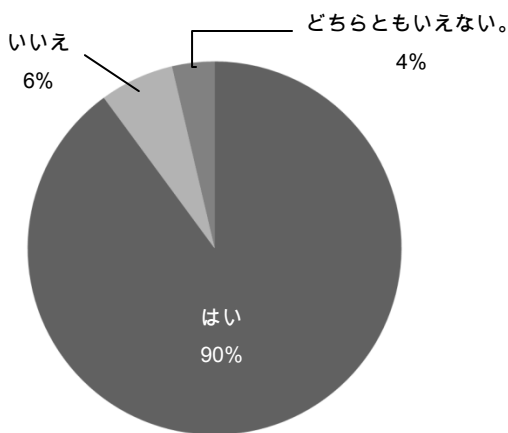
パラナダナ氏は、建築研究所で学んだことが公共事業局の構造・耐震工学の技官である氏のキャリアに大変役に立っていると述べています。特に、5月5日にタイ北部チェンライを襲ったマグニチュード6.2の地震でその思いが強くなったそうです。氏は被災地に赴き復旧可能な建物、寺、住宅の復旧計画を立ち上げました。公共事業省も将来の地震に備えた構造物を作るため建築物の改修が重要であることに気づき始めたそうです。残念なことは近年タイからの工学コース研修参加者が見あたらないことで、遠くない将来、氏の同僚がこの素晴らしいIISEEの研修に参加できることを願っていると述べています。

帰国研修生アンケート(途上国支援としての研修効果の定量的把握)結果

- ・調査期間: 2014年7月～8月
- ・調査対象者: 1960年～2014年3月までの帰国研修生1,618名(重複者を1人と数えると1,485名)のうち、故人及び mail address 不明者を除いた861名。
- ・調査目的: 本研修の成果と将来の展望を下記4点から定量的に探ることを目的とする。
 - ①研修経験を活かす機会が提供されているか。
 - ②途上国のどの分野で活躍しているのか。
 - ③研修成果が仕事に役だっているか。
 - ④将来も本研修に期待をしているかどうか。
- ・調査方法: 電子メール
- ・回答数: 327名。回答率は38%。

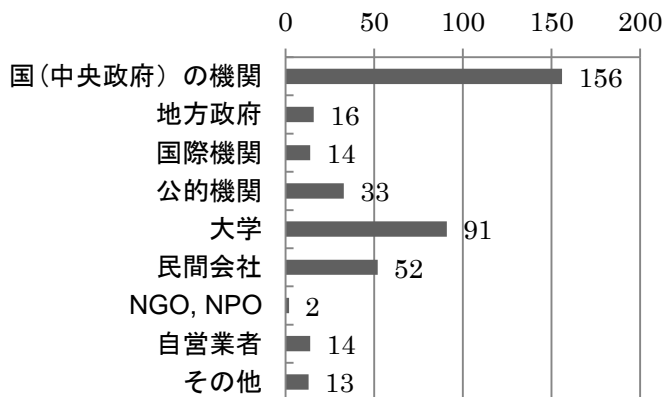
項目	人数
帰国研修生	1,618
帰国研修生(重複参加者を1人と数える)	1,485
物故者	75
mail address 不明者	549
mail 送付者	861
回答者	327

①地震学、地震工学、津波防災といった IISEE の研修分野に関連した業務に就いていますか(いましたか)?



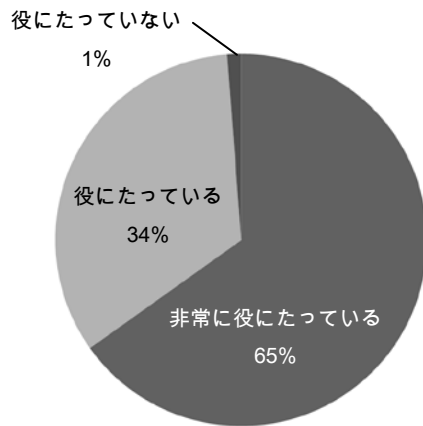
①の回答から、90%の研修生は、帰国後も研修で学んだ地震学・地震工学・津波防災の分野の知識を活かした職業に携わっていることがわかる。同分野の人材育成という目的が達成されていると言える。

②どのような種類の組織に属していますか(いましたか)? (複数回答可)(回答数: 391)

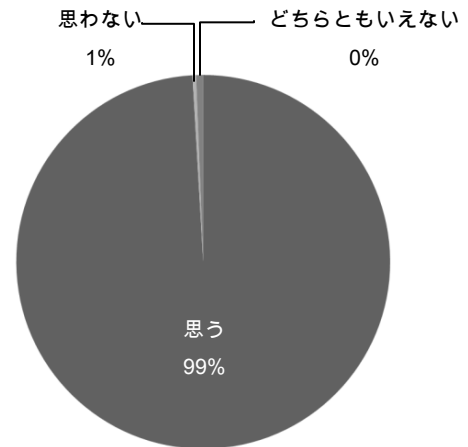


②の回答では、50年を越える歴史を反映し、退職者や複数の職業を歴任した者も多く、複数回答を可とした。国の機関に所属している者が回答者の約半数を占めており、約半数の研修生が帰国後すぐに国の施策に貢献できる職場にいたことがわかる。また、2番目に多いのは、当該国で専門家育成に携わる大学の教官である。専門家の少ない途上国において、大学は教育機関であるとともに専門家集団としての役割を果たしている場合が多い。

③IISEE の研修成果は業務に役にたっていますか？



④IISEE の研修事業を同僚や他の人々に勧めたいと思いますか？



③は、研修で得た結果が帰国研修生にとってどのような意味を持つかを調査するもので、回答は、非常に役にたっている(65%)、役にたっている(34%)の合計が99%という結果であった。これにより帰国研修生にとっては、1年という短い期間ではあるが、本研修で得たものは、その後の職業人としての基盤となっていることが認められる。

④の回答では、99%の帰国研修生が同僚等に本研修の受講を勧めている。本研修に参加した研修生が研修の有効性を認め、今後も継続して本研修に当該国から参加者を送りたいという意向が確認できる。

このアンケートによって、国際地震工学研修が各国の専門家育成に大きく貢献してきたこと、そして将来的にも本研修に対する期待が大きいことがわかりました。ご協力いただいた帰国研修生の皆様に感謝申し上げます。

国際地震工学センター